

## 模型「釧路共同魚菜市場」の制作について ～制作の意図と関係資料～

佐藤 宥紹\*・塩 博文\*\*

Note on the modeling of display “Kushiro Kyoudou Gyosai Shijō”.  
～A plan and data of modeling.～

Hirotsugu Satō\* Hirofumi Shio\*\*

### はじめに

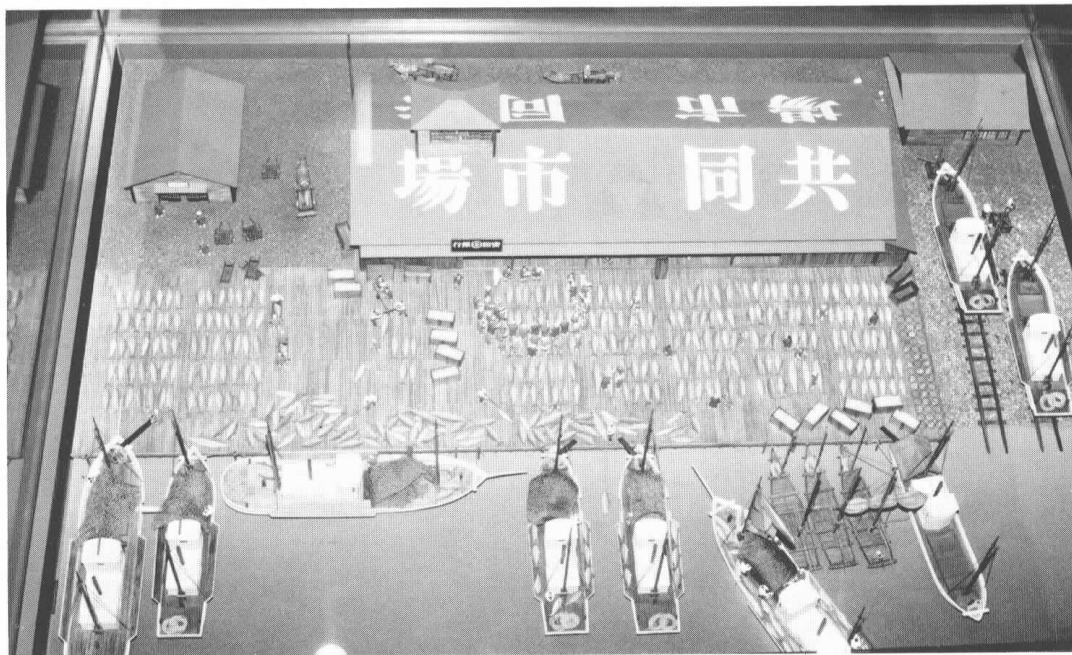
釧路市設魚揚場に設置された水産資料展示室「マリン・トポス・くしろ」の展示資料として、模型「釧路共同魚菜市場」が釧路魚市場(株)から寄贈された(昭和62年7月)。この模型資料の制作段階で資料の収集や検討にあたり、意見を述べたり、調査を担当することになった。ここでは制作の企画段階から設計に至るまでの基礎とした資料や、検討の結果について報告しておきたい。

水産資料展示室「マリン・トポス・くしろ」は魚の水揚げ量全国一を記録する、水産基地・釧路の生産者魚卸売り市場を開設している釧路市設魚揚場内に設置されている。釧路市設魚揚場は、釧路市の基幹産業を担う流通施設であり、そのなかに設置された釧路の水産に関する情報案内施設として誕生している。この施設の概要並びに展示の構成や特徴点については、先に報告したことがあり詳しくはそれに委ねたい。

### 第1節 制作の視点



写真－1 マリン・トポス・くしろの展示室



写真－2 模型「釧路共同魚菜市場」

\* 釧路市立博物館 (Kushiro City Museum, Kushiro, Hokkaido)

\*\* 釧路市道路下水道部道路管理係 (Kushiro City hall, Kushiro, Hokkaido)

## (1) 模型の概要

さて、ここに紹介する模型「釧路共同魚菜市场」は、間口140cm、奥行き110cm、高さ23cmで、縮尺は50分の1の模型である。これを一辺52cmの八角形のステージ上に配置し全方向より展示観察できるように設置してある。

また、ステージの周囲には4面のカラーコルトンをもちいて市場の水揚げの情景、旧高木邸、入舟町の魚河岸復元図などを補充情報として挿入した。

## (2) 制作の考え方

対象範囲 模型の対象範囲は、現在の入舟5～6丁目にあたる旧釧路川左岸の市道米町一入舟線（通称 入舟通りで、当時は「海岸通り」と呼ばれた）と旧釧路川に挟まれた地点で、対象面積は約3,850㎡。この範囲を50分の1模型に縮小した。北限は旧渡船場の渡り口（現在階段がのこっている）、南限は当時の鈴木造船場をもってくぎることとした。

施設としては釧路共同魚菜市场の上屋、神田商店、早坂商店の建物、及び魚水揚げのための接岸岸壁。これに操業地より帰港のマグロ漁船の荷揚げ場面、マグロの整理、計量、セリの場面などを加えて構成している。

対象年次 模型制作の対象年次は昭和4～6年頃とした。調査によれば、釧路市株式会社共同魚菜市场は大正14年7月に釧路発動機船組合が釧路三ツ鱈魚菜市场の事業を継承し、生産者団体による市場業務を開始したことに始まる（『新釧路市史』第二巻）。

入舟に設けられた市場施設は明治43年に(株)共立魚菜市场として設置され、のちに大正4年釧路三ツ鱈(株)共同魚菜市场となり、この事業いっさいを釧路三ツ鱈(株)共同魚菜市场に継承され（大正14年）、市場業務を開始したものである（この施設は昭和12年に閉鎖される）。

市場の復元に必要とされる写真資料については、管見

表－1 釧路港マグロ年別漁獲高

| 年次   | 従事<br>船数 | 漁 獲 高   |           |           |
|------|----------|---------|-----------|-----------|
|      |          | 尾 数     | 貫 数       | 金額(円)     |
| 大正 5 | 9        |         |           | 19,450    |
| 6    | 11       |         |           | 59,720    |
| 7    | 39       |         |           | 193,158   |
| 8    | 72       |         |           | 323,158   |
| 9    | 53       |         |           | 186,918   |
| 10   | 61       | 32,597  | 343,900   | 227,085   |
| 11   | 63       | 11,256  | 200,615   | 230,089   |
| 12   | 43       | 7,435   | 147,987   | 174,650   |
| 13   | 53       | 7,795   | 147,332   | 176,945   |
| 14   | 43       | 24,411  | 331,705   | 333,111   |
| 15   | 103      | 39,501  | 833,248   | 841,635   |
| 昭和 2 | 272      | 58,769  | 1,040,116 | 796,225   |
| 3    | 187      | 87,865  | 1,106,629 | 1,330,671 |
| 4    | 258      | 164,208 | 2,997,852 | 1,637,974 |
| 5    | 250      | 141,112 | 1,787,217 | 1,178,470 |
| 6    | 266      | 182,099 | 1,797,799 | 1,087,184 |
| 7    | 262      | 69,683  | 1,142,243 | 480,060   |

(北海道水産試験場 1934 『水産調査報告』 第31冊 所収)

の及ぶところ大正7年7月の釧路厳島神社祭典を記念した写真にはじまり、大正11年の行啓記念写真帳など十数点の写真資料に限られている。こうした数少ない資料ではあるが、昭和初期に入ると嵯峨家所蔵資料やまた同家の嵯峨旻氏が昭和4年から5年にかけて撮影した16mm映画フィルムなど、比較的データのそろった時期になっている。また、資料でえられた情報の確認や細部を補填するうえでも、当時の関係者の証言が得やすい時期であるなど、復元に必要な一定の条件が整う時期となっている。

また、次に述べるように釧路沖のマグロは明治40年代に初めて揚網した。しだいに捕獲量ならびに釧路港水揚げ量が上昇し、昭和4～5年頃には最盛期を記録する。取扱い金額も最高位となっている。こうした水揚げ記録の更新が、情報の記録化のうえで比較的量も多く、映像・文献・新聞など情報源も多面的となる。

市場の復元にあたって最盛期のマグロ漁を象徴する場面であること、あわせて市場のシステムを紹介する場面設定として、マリン・トポスにおける釧路水産史の展示コーナーである「釧路漁業のきのう・今日」のシボルの展示資料として、模型「釧路共同魚菜市场」を作製した。

釧路漁業とマグロ漁 釧路漁業のなかでマグロ漁の占める位置についてはすでに先学の業績がある。これを要約すれば、(1)マグロ漁が釧路港を基地として行われたのは明治末期から昭和10年代まででその後まったく終焉したもので、釧路漁業史のなかで特異な存在、(2)地元漁業者より外来船の比重の高い漁業で、釧路漁業基地の基礎となりその原動力となった漁業、と指摘されている。

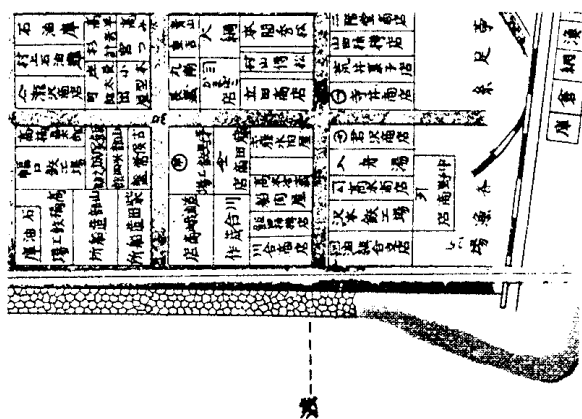
さらに(2)についての内容として、風帆船から動力船に転換する操業漁船の動力化、漁業水揚げ専用漁港の建設、生産者団体による水産物流通組織の発達を促したとする。いま、釧路港の水産物水揚げ金額に占めるマグロの占有率をみると、昭和3年43.8%、4年40.4%、5年44.4%、6年45.5%、で釧路漁業の大宗を占めたとされている。

いま、最盛期の釧路港のマグロ水揚げ量を北海道水産

表－2 昭和4年7～10月下旬期の日別水揚げ尾数

| 日   | 7 月    | 8 月    | 9 月    | 10 月   |
|-----|--------|--------|--------|--------|
| 21  | 1,484  | 76     | 44     | 220    |
| 22  | 1,174  | 41     | 175    | 1      |
| 23  | 241    | 1,763  | 219    | 197    |
| 24  | 93     | 414    | 672    | 1,230  |
| 25  | 117    | 2,132  | 1446   | 412    |
| 26  | 625    | 2,981  | 2,003  | 972    |
| 27  | 1,386  | 3,664  | 966    | 713    |
| 28  | 2,012  | 82     | 2,601  | 980    |
| 29  | 4,232  | 5,307  | 1,024  | 567    |
| 30  | 489    | 1,605  | 562    | 3,782  |
| 31  | 233    | 2,204  | —      | 652    |
| 下旬計 | 11,682 | 20,206 | 9,712  | 9,726  |
| 当月計 | 17,129 | 48,347 | 65,411 | 27,383 |

(北海道水産試験場 1934 『水産調査報告』 第31冊 所収)



図－1 昭和5年の共同魚菜市場付近

試験場『水産調査報告』でみると表1のとうりである。

『水産調査報告』第31冊によると、昭和3～6年はマグロ漁の最盛期であって、これは釧路近海へのマグロの接近があり好漁期にあたっていたものの、漁体の小型化が指摘されやがて不漁期にいたる前兆を示していた。

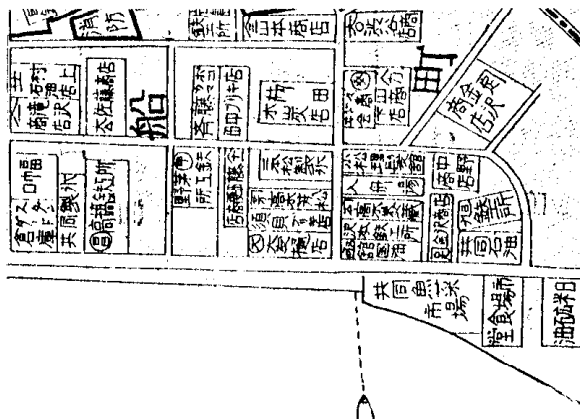
昭和3年一釧路流網漁場ハ7・8月不漁、9月好漁、例年8月ヲ盛期トスルモ本年ハ9月ナリ、終漁期遅レ漁場沿岸ナリ、(略)延縄漁場ハ襟裳岬沖ヲ中心トシテ釧路沖ニ及ビ好漁ナリ

昭和4年一流網漁場タル釧路10ヶ年中最高漁ナリ、漁場厚岸以東ニ及バスシテ最モ沿岸に近接ス、

昭和5年一釧路流網漁場ハ襟裳岬ヨリ落石岬沖ニ亘ル漁場廣汎ニテ集団的漁場ナク中漁ナリ。小鮪多ク平均魚體小ナリ。延縄漁場ハ極端ナル不漁ナリ。

昭和6年一釧路流網漁場ハ前年程沿岸ナラズ、北端ハ色丹島迄ナリ。大鮪ハ魚體著シク大、中鮪著シク多ク平均魚體ハ10ヶ年中最モ小ナリ。

次に昭和4年7～10月下旬期の日別水揚げ量の実績をみておく(表2)。



図－2 昭和7年の共同魚菜市場付近

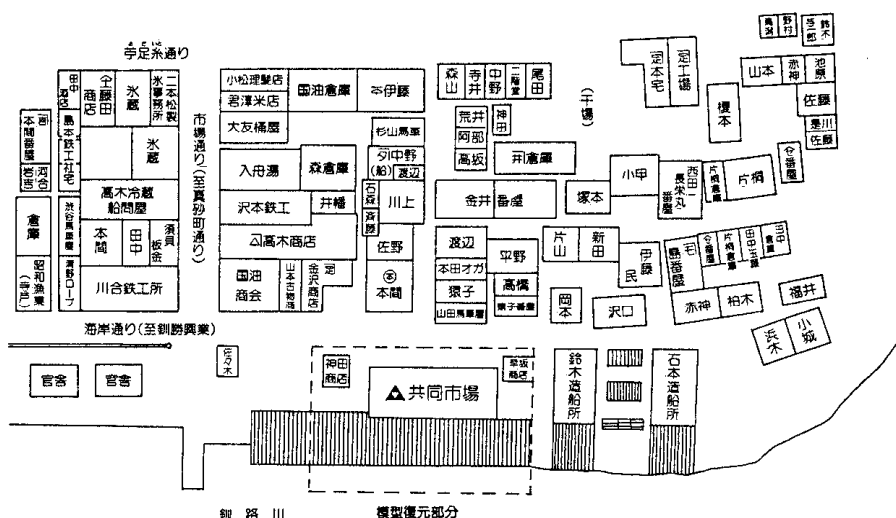
また、昭和4年6～10月期の優良成績漁船として清栄丸、欣喜丸、玉丸、漁牛丸、春日丸、大盛丸、第一清栄丸、永盛丸、新幸丸、二号千英丸が上位10位を占めた。

以上は、マグロが市場に上場された状況や、水揚げ船名及び荷揚げ量などを検討する基礎資料に活用した。

## 第2節 制作に要した資料の検討

### (1) 魚河岸の復元図

展示資料の制作にあたり、先ず検討したことのひとつは旧市場を中心に漁業家、魚取扱い問屋・加工業、製氷業・石油業・馬車屋など資材・運送業、鉄工・造船業などの漁業関連業種によって形成されている、入舟かいわいの魚河岸街を復元することであった。しかし、これを復元した場合、(1)展示資料の面積がかなり大部のものとなり、既存展示のなかに納めることに問題が生ずる。(2)街に所在した施設の配置図が作製できたとしても個々の建物の詳細図をまとめるには、文献や映像の資料が誠に乏しいこと、(3)町並の模型とした場合縮尺が小さくなりすぎ、マグロ漁の最盛期と市場の景観という当初に設定したテーマの主張点があいまいとなってしまう。



図－3 魚河岸復元図

(4)経費的にも魚河岸街を復元することは難しい、などの隘路を抱えることとなった。

しかし、当時の入舟かいわいには水産業を構成するうえで欠かせない町並の形成という、重要な情報があり、これを主張することによって街の歴史性を伝えたいとの意図があった。そこで模型資料そのものは「釧路共同魚菜市場」という市場を中心としたものを対象とし、補助情報のかたちで「魚河岸復元図」を挿入にした。

「魚河岸復元図」の作製にあたり『釧路市街図』、『釧路市大日本職業明細図』を参考にした。

釧路市街図 市立釧路図書館蔵で昭和5年に札幌の交信社の編集・発行になる55cm×80cmの地図。一般には『新釧路市史年表』(1975)の付録に添えられたことで活用されていることが多い。その添付図面は片面印刷であるため目にとまらないが、裏面に職業別の一覧がある。本図には市場の図示がまったくない。

釧路市大日本職業明細図 昭和7年6月26日に東京交通社から印刷出版された55cm×80cmの地図。検討にあたっては釧路市立博物館所蔵の地図を活用した。昭和7年には市街の町名・地番の改正が行われた。これによる新しい町名・地番による地図であるが、広告を募集してこの図を作ったもので、これに応募した者の氏名や事業所の

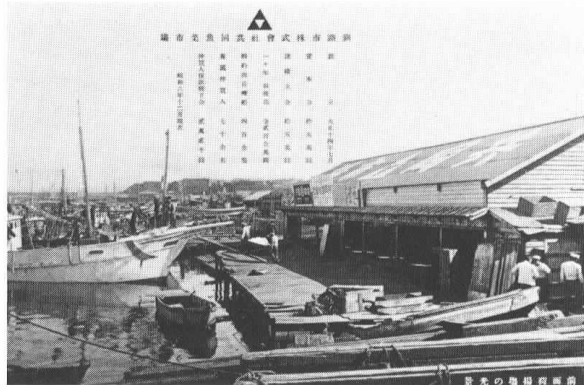


写真-3 市場の上屋と付属施設



写真-4 マグロ漁船の船型資料

掲載一覧であるためか、一般居住者の記載が少ないという問題点がある。

この二点の資料には細かな異動があり、欠落の部分もある点を埋めるため、この地図をもとに入舟町に長く居住されている方の聞き取りで補正することにした。

図-1で「各漁場」とあるあたりに住居を構えていたはずの漁業家や、番屋などの記載が見当たらない。まして、肝心の市場が記載されていない。図-2でも漁業家の記載がない。この漁業家や番屋を結ぶ道路もしっかりとした街路ではなく踏みわけ道くらいのものであったと指摘された。そのうえで個別に検討し補正することにして得られた結果が図-3である。

## (2) 市場の上屋及び付属施設

市場の上屋について関係図面の検索を行ったが、経営を継承している釧路魚市場(株)にも該当の書類がなかった。また漁業史に詳しい地方史研究者の手もとにもなく、上屋については昭和6年の魚市場の業績を掲示した写真3が唯一の情報といってよかった。もうひとつの情報源は模型資料の製作発注者側の情報提供者である釧路魚市場(株)の山本久相談役からの聞き取りである。

市場構内の造作物として、市場上屋、神田商店と早坂商店の3軒があり、構内に隣接して鈴木・石本造船場があることがわかった。昭和7年の図面に「市場食堂」とはあるが、2軒の造船場と商店の記載は2点の図面ともなかった。映画フィルムによれば商店と造船場が確認できるほか、聞き取りに協力された川合久子氏(昭和2年生)と山本氏の意見が一致していた。

市場施設の復元にあたり、市場の建物、すなわち上屋のスケールをきめることにした。山本氏は間口20間、奥行き12間の建物であったと回想された。この証言を写真-1をもとに検討をくわえることにした。

写真-1は釧路魚市場(株)が同社の社屋内に展示しており、昭和6年に撮影されたことが、写真内に刷りこまれている。



写真-5 荷揚げの場面設定資料

れている。

この写真にある市場の扉の寸法から間口と高さを割出していくことができた。一枚の扉の幅を山本氏に確認したところ1間幅、高さ9尺とのことであった。これを周辺の人物に比定して扉の寸法を割出し、これからまず間口について山本氏の証言を裏付け、さらに建物の高さを推定せざるを得なかった。ところがこのような方法で建物の奥行きスケールを割出してゆくと山本氏の記憶どうり、奥行きが12間というのはどうも大きすぎることになる。それと12間の屋根をささえるためには、途中で支柱となる柱がかなり必要となるが、写真-7を検討する限りそうした柱を確認することはできなかった。さらに写真1で間口と奥行きの比率を比較すると、どうも20:12=5:3よりも小さい比率になると認めざるを得ない。そこで写真から計算しなおして得られた数値で奥行きを6間と推定することにした。また、写真-3によって看板、扉、日章旗、氷、氷運搬用タンカ、延縄ザルなどの付属物復元の情報を得た。

### (3) 繋船岸壁

模型資料の復元のうえで大きな役割を果たしたのは、釧路市住吉 嵯峨漁業部(嵯峨仁社長)の所蔵資料写真である。嵯峨家は先々代の嵯峨久が「釧路漁業の父」と呼ばれ、漁業基地・釧路の基礎を築いた人として知られる。昭和初期には入舟町に住居を構えていて釧路共同魚菜市場の初代社長を勤めている。

嵯峨久の業績のひとつは漁船の動力化を推進したことである。それまでの地元漁船の主力は川崎船で風帆船—無動力船である。昭和2年8月27日の暴風雨で、18隻の漁船が遭難したのを契機に漁船の動力化が始まったとされている。マグロの動力漁船には二つのタイプがある。外来のマグロ船には水押し先端部が長く突出した「突きん棒」があるのに対し、地元船にはこれがない。外来船は富山・岩手県方面からきたマグロ船で、釧路港に水揚

げする。地元マグロ船は富山県から釧路近海に出漁しながら、やがて釧路港を根拠地として操業する船である。

この地元船、外来船のポジションや景観は資料写真-4があるのであらましを知ることができた。しかし、基本となる形状や寸法のデータとして、文献のうえでは嵯峨久氏の『昭和5年度鮪漁業概況』があり、このなかで総噸数14.6~18噸との記録がある。これだけでは、十分ではないため造船業を営んでいた、鈴木喜策氏に紹介したところ、地元・外来とも今日の19トン型に相当するものと教えていただいた。

港に繋船した写真によれば、動力船にまじって川崎船がみられる。こちらのほうは本館の展示を構成するために、平岩一氏に建造してもらった川崎船の図面があるので、それによって復元することとした。

### (4) マグロの荷揚げと整理

ついで、着岸のマグロ漁船の荷揚げからセリにかけられる間に計量、整頓、墨付け、下見などの場面がある。

荷揚げについては資料写真5によった。荷揚げのマグロはクロマグロとカジキマグロの二種類とした。計量は竿はかりをもちいており、計量場面の写真-6があつたのでこれを情報源とした。墨付けは荷主を示すため、マグロの一本ごとに屋号と船名を白いペンキで記載する。

セリに先立ち仲買人の吟味が行われる場面も、市場の構成要素の一つとして加えた。市場職員並びに仲買人の服装は、大正7年の釧路厳島神社の祭典記念写真や大正11年の『摂政宮殿下行啓記念写真帳』のほか、映像資料より決定した。

つまり、それぞれの場面の資料写真があり、16mm映画のなかにも作業の経過が手際よく記録されているという条件の整っていたことが幸いしている。

### (5) マグロのセリ

この模型資料の焦点をマグロのセリの場面においている。セリの構成要素として、①市場職員(セリの開始を



写真-6 マグロ計量の資料(映画よりおこす)



写真-7 市場に整頓された場面



写真-8 服装の資料

告げる鐘を鳴らす係り、庭帳書き、セリ人、かぎとりなど)、②買手側の仲買人、それに③セリ人と仲買人とのセリのからみの場面の3点をもちこんだ。資料写真に該当するものはなかったが、16mmの映像に収録されており、それより起こしたポーズのひとつが写真9である。映像の細かな記録によって、人物のポーズについてもかなり細部の点まで情報を得ることができた。

#### (6) マグロの搬出

セリを終了したマグロは馬車や大八車で搬出される。復元資料のポジションとしては、昭和初期の写真で北大通り4丁目付近を木材搬送中の馬車の写真がよく知られている。寸法については細部が不明で、結局、北海道開拓記念館が『北海道における伝統的職人技術』に所収の馬車に関する資料を参考とした。

### 第3節 制作の成果と課題

制作の対象となったのは、『釧路共同魚菜市場』という一施設にすぎない。しかし、この時期のマグロ漁と、その釧路港への水揚げが、釧路水産史のなかで極めて重要な位置を占めていたことを考えれば、マグロ漁の取扱い量の大きさと市場の盛況を、いかなる方法をもって市民に伝えるかという課題に応える素材として、欠かせない情報であった。

今日、釧路港が魚の水揚げ量日本一を記録する、全国有数の漁業基地の基礎は、おおむねこの時期に築かれたわけであり、その大きな要因のひとつであるマグロ漁の存在をいっきと伝えることの意味はたいへん大きい。

あるいは、市場の取引機構が近代化されるなかで、取引の手順や方法も変貌しているものであり、特定の時期を画して復元を試みることは、その発展過程を記録するうえでも意義のあることと考える。

いっぽう、この模型制作に必要な情報というのは実に多様であって、求めている情報は誠に不足であった。当事者にとって、実にあたりまえとされたことが、長い年



写真-9 セリの場面(映画よりおこす)

月をへて人かわり、時代が移るにともない、情報が消失してしまっているためである。嵯峨旻氏による映像記録という好資料があったにせよ、確たる資料より推定に頼らざるを得なかった部分が多い。この点については、模型資料を素材としながら、多くの人からより確かな情報が寄せられることを、せつに願うものである。特に、将来縮尺を拡大し、市場を軸にした町並みの復元を行う場合には、より厳密な考証と資料の細部にわたる検討が必要である。

幸いこの模型資料に対し、展示観覧者からは好意的な意見が多い。展示コーナーを締めくくるにふさわしい資料が加えられたことで、展示にいつそうの厚みを与えることができた点は大きい。

最後になるが、本資料の制作にあたり、ご指導とご助言をいただいた金井俊一、山本久、布施正、澤四郎、福野悠久氏、資料の提供と利用にご配慮を賜った嵯峨仁、鈴木喜策、川合久子氏はじめ入舟にお住まいのみなさんに深くお礼申上げる。各位のご配慮を十分生かすことができたものと、とまどいがあるがご助言がなければもとより完成は困難であったと実感している。

### 引用参考文献

- 澤 四郎(1987)「釧路市立博物館における50年の取組み」国学院大学編『国学院大学紀要』第10号所収
- 澤 四郎(1987)「地域環境と博物館」日本博物館協会編『博物館研究』No.23-09
- 佐藤 宥紹・塩 博文(1986)「産業施設における展示の試み」日本博物館協会編『博物館研究』No.22-09
- 釧路市史編纂事務局編(1973)『新釧路市史 第二巻』
- 布施 正(1962)『釧路漁業発達史』
- 北海道水産試験場(1934)『水産調査報告』第31冊
- 嵯峨 久(1930)『昭和5年度鮭漁業概要』